



秩父札所参り絵馬 一部拡大 (画像提供/朝霞市教育委員会、所蔵/内間木神社奉賛会)

かわはく No.85

CONTENTS

開催案内：令和7年度 春期企画展 巡礼者は秩父を目指す！

～文献とモノから見つめ直す秩父札所の歴史～	2
開催報告：体験教室「甘酒はなぜ甘い？コウジカビのはたらき」	4
開催報告：ミュージアムカフェ「教えて館長！博物館てなぁ～に？」	5
お知らせ：春期企画展関連グッズを販売しています	6
学芸員コラム：土の上にも、数珠？	6
学芸員コラム：自動撮影カメラが動物の生態調査を変える？	7
学芸員コラム：土にすむ生きもの	7
イベント情報コーナー 4・5・6・7月	8



開催案内

令和7年度 春期企画展

巡礼者は秩父を目指す! ~文献とモノから見つめ直す秩父札所の歴史~

開催期間：2026年2月7日(土)～5月6日(水・振休)

今年は、秩父札所の午歳総開帳の年にあたります。秩父札所は、観音菩薩を祀る34ヶ所の寺院から成る霊場で、西国、坂東と併せた百番観音霊場としても信仰されています。

江戸時代には、江戸市中で秘仏を公開する出開帳を積極的に開催し、広く信者を獲得していました。巡礼者は江戸市中や関東だけでなく、全国からも集まり、道中日記や納経帳といった形で旅の記録を残しています。

本企画展では、全国各地に残された資料を通じて、秩父を訪れた巡礼者がどのような体験をしたのかを読み解いていきます。

第1章 巡礼者は秩父を目指す!

秩父札所は、荒川の上流部に位置する秩父地方に位置しています。地図や古文書を展示し、全国、関東、北武蔵における秩父札所の立ち位置を紹介します。

第2章 秩父札所の始まり

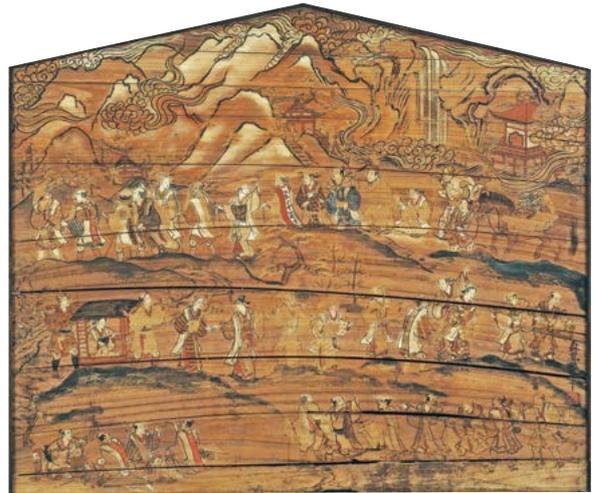
室町時代に始まったとされる秩父札所は、当初は33ヶ所でしたが、江戸時代までに34ヶ所となりました。秩父札所開闢にかかわる伝説的な巡礼者である、十三権者ゆかりの品などを通して、その始まりを紐解きます。



十三権者像 (所蔵/個人)

第3章 巡礼者の支度

現在の札所では、おいずる、菅笠、金剛杖、輪袈裟、持鈴を「巡礼の晴れ着」と呼んでいます。江戸時代の巡礼者の装束について、当時の衣装や、絵馬などの絵画資料をもとにして紹介します。



秩父札所参り絵馬

(画像提供/朝霞市教育委員会・所蔵/内間木神社奉賛会)

第4章 秩父札所をとりまく人・モノ

秩父札所は、江戸で繰り返し行われた出開帳により、町人のみならず将軍家からも支持を受けて、伽藍の整備などを行ってきました。札所には、当時寄進されたものが宝物として大切に保管されています。本章では、札所に関する歴史が分かる資料を展示しています。

第5章 秩父を訪れた人々

江戸時代の巡礼の様子は「道中日記」と呼ばれる旅日記によって、その内容を確認することができます。現在までに確認できた51点の道中日記から、現在の栃木県佐野市出身の六十六部・道観や、長野県坂城町出身の沓掛なか子のものなどを取り上げて、その軌跡を紹介します。

第6章 衰退と復興の近代

明治時代の廃仏毀釈によって、一時、秩父札所は衰退しました。しかし、大正時代に入ると、鉄道による交通の発達などによる復興が進み、現在



に至っています。最終章では、衰退を示す物品と共に、鉄道会社が出した秩父札所キャンペーンなどを紹介します。

○サテライト展示

1) スロープ展示「納経帳の変遷」

開催期間：2月3日(火)～6月21日(日)

江戸時代から現在に至る秩父札所の納経帳を比較すると、時代ごとに変化があることが分かります。

現在までに見つかっている中で、最も古い納経帳である宝永3(1706)年「納経覚帳」や、展示担当者が自ら札所を回って集めた令和7(2025)年「奉秩父三十四ヶ所霊場納経帳」といった納経帳を時代順に並べて展示しています。

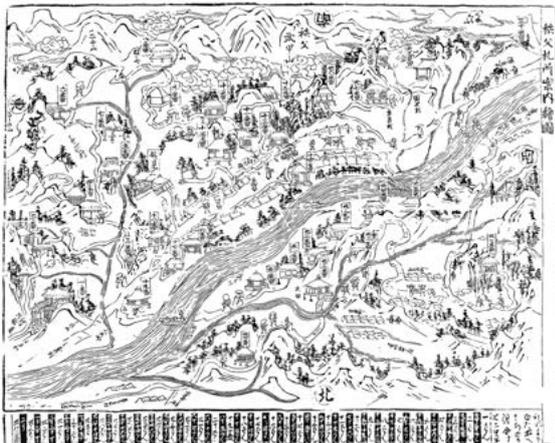


スロープ展示の様子

2) 蔵出しコーナー「秩父地方の渡河」

開催期間：2月10日(火)～6月21日(日)

秩父札所は、荒川の兩岸に点在しているため、荒川を何度も渡河しながら巡礼をすることになります。札所1番四萬部寺が所蔵する版木で摺った「秩父札所案内絵図」には、画面右上から左下にかけて大きく荒川が描かれ、3ヶ所に渡し場があることが確認できます。



「秩父札所案内絵図」(版木所蔵/1番四萬部寺)

蔵出しコーナーでは、板木とともに、巡礼者がどのようにして荒川を渡河していたのかを、10分の1サイズで再現した渡船の模型などを展示して紹介します。

○展示解説

担当の学芸員が展示を解説します。

日時：4月12日(日)

①10:00～ ②13:30～

場所：第2展示室

定員：各回10名程度

参加費：無料

○期間限定コラボメニュー

レストランウォーターミルでは、企画展とのコラボメニューを提供しています。

今回は、江戸時代の巡礼者が食べた食事をイメージした「巡礼ごぜん」をお楽しみいただけます。切干大根とシソの酢の物や、高菜入りのお味噌汁、アラムの代わりにヒジキを加えた煮物など、道中日記に記された食事を美味しく再現しています。

仕入れ状況により内容が異なる場合がございます。また、ゴールデンウィークや土日祝日には、数量限定での販売となる場合がございます。



期間限定のコラボメニュー「巡礼ごぜん」

○オリジナルグッズのご紹介

本企画展では、納経帳やおいずる、納札など、秩父巡礼に必要な用品をセットで販売しています。他にも当館オリジナルグッズも取り揃えていますので、来館時にはぜひショップにもお立ち寄りください(ラインナップなど詳しくは、6ページをご参照ください)。

(学芸グループ 矢嶋正幸)



開催報告

体験教室

甘酒はなぜ甘い？コウジカビのはたらき

3月3日のひな祭りは、子どもたちの健やかな成長を祈る行事です。ひな祭りにいただくお祝いのご馳走といえば、ちらし寿司にハマグリのお吸い物、ひなあられ、菱餅、そして白酒です。白酒はお米を原料とし、とろみと甘みのある白濁したお酒です。白酒は、もちろんアルコール飲料ですから、子どもたちは白酒の代わりに甘酒を飲みます。

ひな祭りまで1週間ほど早いですが、当館では2月21日(土)に体験教室「甘酒はなぜ甘い？コウジカビのはたらき」を開催しました。

みなさんは甘酒に種類があることはご存知でしょうか。実は、「甘酒」として売られているものは「米麴甘酒」と「酒粕甘酒」の2つに分けられます。前者はお米・水・米麴のみから作られ、アルコールを含まず、自然な甘みが特徴です。後者は、日本酒を作る過程で生じる酒粕をお湯に溶き、砂糖を加えて調味したもので、微量のアルコールを含み、お酒の風味があるのが特徴です。どちらもコウジカビ (*Aspergillus oryzae*) という菌類のなかまがかかわる「発酵」によって作られます。

発酵とは、菌類などの微生物が有機物（特に食品）を分解する過程で生じる“人にとって有益な変化”のことです。私たちが食べ物を唾液や胃液に含まれる酵素を使って消化するのと同じく、菌類も酵素を分泌して分解・吸収しています。コウジカビは、お米などの穀物に含まれるデンプンを糖（グルコースなど）に分解する力が強いので、甘酒づくりに欠かせないのです。



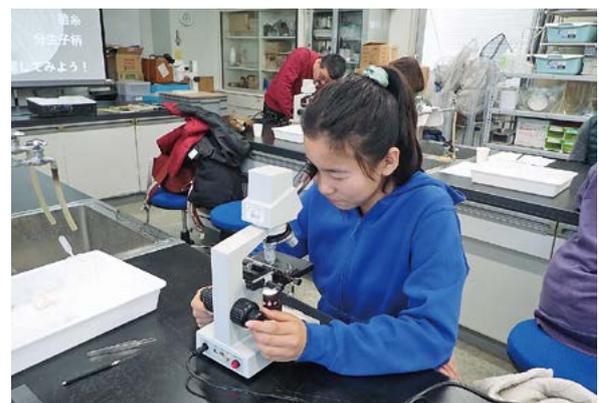
米麴(左)とコウジカビの顕微鏡像(右)

では、コウジカビによる発酵でもたらされる“有益な変化”とは何でしょうか。甘酒といえば、冬に飲む温かい飲み物のイメージがありますが、

江戸時代には暑い夏にこそ積極的に飲まれるものでした。これは、体調を崩しやすい夏でも甘くて飲みやすい上に、お米を食べるよりも効率的に栄養を得られるためと考えられます。

埼玉県を含め、全国各所には甘酒を主体とする夏のお祭りが存在します。そのうちの一つ、小鹿野町間庭の「甘酒祭り」は、流行り病が流行した際、甘酒を神前にお供えしたところ治まったという言い伝えが由来となっています。現在でも、7月に無病息災を祈願し、お供えした甘酒を参加者に振舞うお祭りが続いています。

体験教室では、実際に米麴（蒸したお米にコウジカビを生やしたもの）を使ってプレパラートを作製し、顕微鏡でコウジカビを観察しました。コウジカビの菌糸や孢子、孢子をつくる細胞などをじっくりと観察した後は、お米の上でコウジカビがどのように生えているのかを学べるペーパーモデルを組み立てました。このペーパーモデルは、完成したものを複数個つなぎ合わせることで、コウジカビの菌糸の広がりにより視覚的に感じることができます。



体験教室のようす

参加者からは、「孢子があったりなかったりすると、同じコウジカビでも異なって見える」といった発見や「(ペーパーモデルを使って)菌糸や孢子をつくる様子が立体的に理解できた」「もやしもん(石川雅之、講談社)という漫画に出てくるA.オリゼーをいつか見てみたかったので良かった」などの感想をいただきました。

(学芸員グループ 板垣ひより)



開催報告

ミュージアムカフェ

教えて館長！博物館てなあ～に？

開催日：2026年2月21日(土)

昨年度に引き続き開催している、かわはくのミュージアムカフェは、お茶とお菓子などを飲みながら、食べながら博物館のことを話題におしゃべりをするイベントです。



かわはくミュージアムカフェの様子

世界には様々な博物館があり、それぞれが特徴を持って活動しています。そこで今回は、国際的な博物館のあり方を議論して、その存在意義を社会に発信している「国際博物館会議」を中心に紹介しました。国際博物館会議の総会は3年に一度開催されています。近年では2019年に京都、2022年にチェコのプラハ、2025年にアラブ首長国連邦のドバイで開催されました。京都大会では4,500人以上の世界の博物館関係者が参加し、博物館のあり方、博物館の定義について提案がありました。議論がまとまらず、採択されませんでした。プラハ大会ではオンライン参加も含め約3,600人の参加があり、京都大会で積み残しとなっていた博物館の定義について再提案があり、採択されました。この大会で採択された以下の定義が、国際的に共通認識されています。

博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、楽しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。

博物館の定義は時代の変化とともにこれまで8回改定されています。前回の改定は2007年のウィーン大会です。今回の定義では「包摂的」「多

様性」「持続可能性」などの新たなキーワードが加わりました。博物館には多様な文化を持つ人々を受け入れ、社会の持続可能性を高めていくことが期待されています。また、「コミュニティの参加とともに」は注目すべき表現です。社会の中で博物館が単独で活動するのではなく、地域住民やコミュニティとの協力によって活動していく姿が重要だと思います。

さて、4,500人以上が参加したドバイ大会では、「急速に変化するコミュニティにおける博物館の未来」をテーマとし、国際情勢や地域社会に対応する博物館のこれからを考えました。ミュージアムカフェではドバイ大会での各発表セッションや各国が出展したブースの様子などを紹介しました。私は国際博物館会議を構成する34の国際委員会の中で「科学技術の博物館・コレクション国際委員会」(CIMUSET)に参加しました。CIMUSETは歴史資料を有する科学技術系博物館と子ども・若者への科学技術普及を担うサイエンスセンターの専門家で構成される委員会です。ここでの研究発表や、ドバイの未来博物館を紹介しました。ミュージアムカフェ参加者からは「未来感が半端ない！」との感想もいただき、盛り上がりました。



ドバイ未来博物館 (小川撮影)

世界各地の博物館は様々な工夫と努力を重ね、多様な文化を育て、継承する活動を展開しています。ミュージアムカフェを通じて、多様な博物館を知り、博物館が何を目指しているのかを理解する機会になれば幸いです。

(館長 小川義和)



お知らせ

春期企画展関連グッズを販売しています

春期企画展のテーマに合わせ、秩父巡礼にまつわるバッグとタオルを制作しました。どちらも企画展担当者より「こんな絵図があるけど、これを活用してグッズを作ってみませんか」と提案があり、グッズの完成に至りました。

巡礼者が身につける頭陀袋をイメージした肩掛けバッグには、蔵出しコーナー「秩父地方の渡河」で展示中の「秩父札所案内絵図」を大きく印刷しました。武甲山が正面に、荒川が中央に配置され、東西南北が現代と逆転しています。巡礼者が各所に描かれ細部まで楽しめます。

タオルは、手のひらサイズに蛇腹折りされたパンフレットのサイズ感を活かしました。デザインの基となった「秩父三十四ヶ所案内図」は、昭和初期に発行され、やはり武甲山を正面に臨みます。色鮮やかな絵図の中央を鉄道が横切り、船や徒歩による渡河が描かれた「秩父札所案内絵図」からの時代の流れを感じます。

当館で制作したグッズの他に、秩父札所連合会公式の納経帳やおいづるのセットも販売しています。さらに、以前より販売しているかわはくオリジナルの竹笠を身につければ…。

企画展を見た後は、当館で巡礼道具を揃えて巡礼の旅に出かけませんか？

(学芸グループ 三瓶ゆりか)



学芸員コラム

土の上にも、^{じゅず}数珠？

かわはくでは維管束植物のジュズダマが見られますが、数珠にちなんだ生き物が他にもいます。

かわはく園内を流れる宮川の右岸歩道脇、土が覆いかぶさったところをよく見てみると、黒っぽい塊がへばりついていました。晴れた日には乾燥



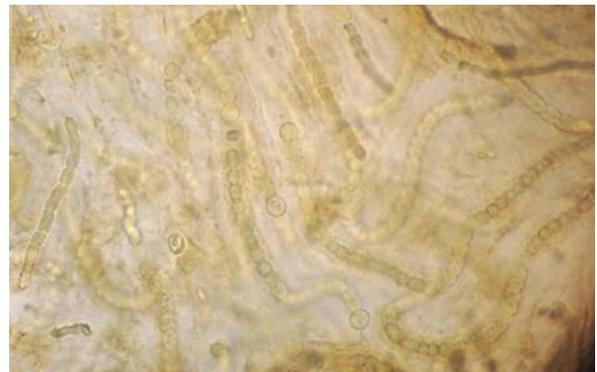
イシクラゲ

してカピカピですが、雨が降ると水分を吸収してプヨプヨになり、乾燥わかめみたいです。これを水で戻して押しつぶし、顕微鏡で観察すると、球形の細胞が連なった、まるで数珠（念珠）のような構造が見えます。実はこれ、「イシクラゲ」という生き物で、ネンジュモ目ネンジュモ科ネンジュモ属のラン色細菌の一種です。

彼らは植物と同じく光合成を行います。単純で原始的な構造の細胞をもつ原核生物です。とこ

ろどころに見える丸い透明な細胞では、窒素固定を行います。群体となった細胞から分泌される寒天状の物質で群体どうしがくっつき、塊になります。イシクラゲは、水はけの悪い駐車場や校庭などで、ごく普通に見られます。

「ジュズ」や「ネンジュ」といった言葉は、生きものの名前によく使われています。それだけ身近な道具だったのですね。



顕微鏡で見たイシクラゲ

(学芸グループ 三瓶ゆりか)



学芸員コラム

自動撮影カメラが動物の生態調査を変える？

野生動物の生態調査は、個体の行動を観察するだけでなく、糞や食痕、足跡などの痕跡を調べ、日々のデータを積み重ねることで生態の解明を目指します。それには時間と労力、そして調査者の根気が求められますが、近年は調査ツールの発展により、生態調査が劇的に変化しています。

なかでも「センサーカメラ」や「トレイルカメラ」と称する自動撮影カメラは、動物調査に革命を起こしたと言っても過言ではありません。従来手法を重視する方々にはお叱りを受けそうですが、これらは比較的安価に入手でき、かつ動物の行動観察に有効なツールです。自動撮影カメラが仕掛けられた定点にやってくる動物たちが被写体（調査対象）になります。赤外線センサーが反応するとカメラが作動し、活動中の動物を動画・静止画どちらでも撮影できます。

自動撮影カメラによる調査では、学術的価値のある新知見や、地域の自然史として重要な記録が

得られることが少なくありません。警戒心の強い野生動物の自然な姿に迫ることができる、大変優れたツールと言えます。

さらに、自動撮影カメラはイノシシなどの害獣による農業被害の解明にも活用できるほか、通信手段の向上により、遠隔のスマートフォンで撮影データが閲覧できるようにもなっています。稼働時間がネックであった電源装置も、太陽光バッテリーの搭載により長期間でも交換が不要になるなど、かなりの進化を遂げています。価格は数千円から数十万円までと幅があり、耐久性や性能などにかなり差がありますが、私もありがたく活用しています。



自動撮影カメラ

(学芸グループ 藤田宏之)

学芸員コラム

土にすむ生きもの

だより78号で紹介したように、土を語るときに生きものの存在は欠かせません。地上の植物や動物が枯れたり死んだりすると、土にすむ生きものたちが、それらを食ったり分解したりします。どのような生きものがあるのでしょうか？肉眼でも観察できるミミズやヤスデ、虫メガネでやっと見えるくらいのダニやトビムシといった土壌動物、顕微鏡で見えるような菌類（カビなど）や細菌類などの土壌微生物たちです。

これらの生きものは地上の動物と比べると小さいですが、合計の重さで比べると、土の中の動物は地上の動物の10倍、さらに微生物はそれ以上に重いといわれています。これらの生きもののお多くは地表面から下15cmほどの土の中にいるので、ひとすくいの土は、まさに生きものの宝庫です。

そんなにたくさんの生きものたちは、土の中でどのように暮らしているのでしょうか。生きもののお大きさを考えてみましょう。仮にミミズが10cm、トビムシが1mm、微生物が1μmとすると、最新版



ヤスデ



トビムシ

のゴジラと人と、コメ粒が同じ家にすんでいるようなことになります。土が、砂や粘土などの無機物と生きもの由来の有機物が混ざった物質から成る構造物で区切られた家と考え、ミミズが暮らすとても大きな部屋があれば、微生物がひそむとても小さく湿った部屋もあります。そしてそこに暮らす生きものは絶えずその部屋を押し広げたり、壁を食ったり、あるいは自らが死んでその構造に取り込まれたりしているのです。私たちがみると何でも無いような土という環境の中には、とてもダイナミックな世界が広がっている…、と思いませんか？ (学芸グループ 森圭子)

4月

春期企画展「巡礼者は秩父を目指す！」

4/土

体験教室「カビを育ててみよう①」

時間：13:30～15:00

費用：300円

定員：15名

内容：培地に好きなものを置いてカビを培養します。

11/土

体験教室「カビを育ててみよう②」

時間：13:30～15:00

内容：①に引き続き、育てたカビを観察します。

12/日

春期企画展 展示解説

時間：①10:00～ ②13:30～

内容：展示の見どころを学芸員が解説します。

研究室「オタマジャクシを観察しよう」

時間：13:30～15:30

内容：早春に産卵するカエルのオタマジャクシを観察します。

25/土

荒川ゼミナール「台地の上は本当に平らなのか?②

～和光市でプチ登山?!～

時間：10:00～16:00

費用：300円（保険料）

定員：20名

内容：和光市内を散策し、土地の浸食による高低差を体感します。

26/日

あそぼう・まなぼう「草笛であそぼう」

時間：13:30～15:30

内容：身近な植物で草笛を作って遊びます。

5月

23/土～

東京藝術大学学生による「河川・水系」作品展

3/日・祝～5/火・祝

季節のイベント「かわはくGWまつり」

時間：10:00～16:00

内容：日替わりでさまざまなイベントを開催します。

5/火・祝

あそぼう・まなぼう「ストーンペインティング」

時間：13:30～15:30

内容：地質の日を記念して、荒川の小石に絵を描きます。

9/土

荒川ゼミナール「台地の上は本当に平らなのか?③

～志木市内の新旧堤防比較と土地の高低差体験～

時間：10:00～16:00

費用：300円（保険料）

定員：20名

内容：志木市内にある三世代の堤防とマンション群の間の谷を散策します。

体験教室「チリメンモンスターをさがそう」

時間：13:30～15:00

費用：200円

定員：20名

内容：シラスの中に混じっている小さな海の生きものを探して観察します。

24/日

研究室「森の宝石－変形菌－を観察しよう」

時間：13:30～15:30

内容：変形菌の標本を顕微鏡で観察します。

6月

7/日

あそぼう・まなぼう「水質しらべ」

時間：①10:30～ ②13:30～

内容：環境の日を記念して、水質検査の疑似体験をします。

13/土

体験教室「蚕にえさをやってみよう」

時間：①10:30～ ②13:30～

費用：100円

定員：各回20名

内容：カイコの飼い方を学び、家で育ててみましょう。

14/日

研究室「田んぼの小さな生きものを観察しよう」

時間：13:30～15:30

内容：ミジンコ類や水生昆虫を観察します。

7月

11/土

特別展

「アンモナイト～太古の海からのたより～」

5/日

あそぼう・まなぼう「七夕かざりづくり」

時間：①10:00～ ②13:00～

内容：川の日を記念して、七夕かざりを作って笹に飾り付けます。

12/日

特別展 展示解説

時間：①11:30～ ②14:00～

内容：展示の見どころを学芸員が解説します。

18/土

体験教室「竹の水鉄砲づくり」

時間：13:30～15:30

費用：300円

定員：15名

内容：竹でつくった水鉄砲で水遊びを楽しみます。

19/日

研究室「珪藻を顕微鏡で観察しよう」

時間：13:30～15:30

内容：生きた珪藻や珪藻土を観察します。

20/月・祝

特別展開連

「アンモナイトのカラフルレプリカをつくろう！」

時間：①10:00～ ②13:30～

費用：100円

定員：各回10名

内容：プラスチック粘土を使ってアンモナイトのレプリカをつくります。

25/土

大人のための講座「伝統漁法シンポジウム」

時間：13:00～16:30

費用：100円

定員：100名

内容：瀬張漁などの伝統漁法について学び、その継承について考えます。

26/日

特別展開連「化石の発掘体験」

時間：13:30～15:30

費用：300円

定員：15名

内容：岩石を割って化石を発掘します。

ホームページでも紹介しています！

<https://www.river-museum.jp>

【お願い】①イベントは諸事情により変更になることもあります。ご了承下さい。②印のついた行事は事前申し込みが必要です。費用に「保険料」が含まれるイベントの申込締切日は、各イベント開催日の2日前までです。③定員になり次第締め切ります。

編集・発行

埼玉県立川の博物館



〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39番地
TEL/048-581-8739 (学芸グループ) FAX/048-581-7332
ホームページのフォームからもお問い合わせいただけます。
<https://www.river-museum.jp>または「かわはく」で検索
X(旧Twitter)やInstagramでもイベントの配信を行っています。
かわはくHP トップページ二次元コードはこちら →

2026年3月31日発行

